

要領様式第2号

出張報告届

令和5年7月7日

吹田市議会議長様

会派名 参政党議員団

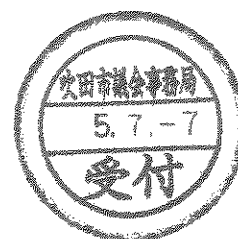
代表者氏名 中西 勇太

出張者氏名 久保 直子

下記のとおり出張したので届け出ます。

記

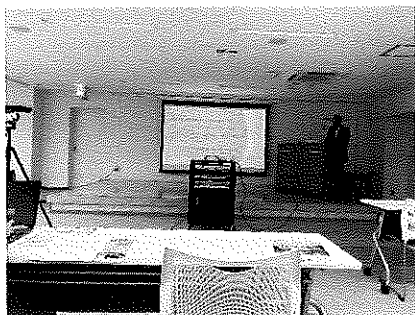
出張先	文京区民センター
期間	令和5年6月29日から6月29日まで 1日間
出張の成果	別紙のとおり
備考	



いま日本の学校はどうなっているのか

～文科省よ現場のリアルを聴け！～

～転機を迎えた日本の学校教育～



講師 安達 弘

(元横浜市公立小学校教諭)

令和5年6月29日(木)

文京区民センター2階 A会議室

(東京都文京区本郷4-15-14)

新しい歴史教科書をつくる会／同東京支部(共催)

【講演要旨】

(1) 4つのテーマで現場を見る。

テーマ① 学校と放課後・・・何もかもが持ち込まれる

テーマ② 学校と情報・・・不要な情報と無駄な書類

テーマ③ 学校といじめ・・・学校ができることの限界

テーマ④ 学校と専門機関・・・教育を超えたスキルの必要

(2) 現場の実態

(3) 学校はどう変わればいいのか(安達先生の提案)

(4) 学校はどう変わればいいのか(久保直子の提案)

1. はじめに

今や多くの人々が薄々知るようにはなっているが、日本の学校現場は限りなく「ブラック産業化」しつつある。しかし、現場の厳しさは一般の人々に伝わっていない。現場教師はそれを歯痒く思っている。いくつかの改革案や提言が出されているものの、識者のコメントの多くは、教育現場の事態と離脱した空論だったり、かえって現状をさらに悪化させるものとなっていたりする。このままでは、教職の志望者はますます減り続け、日本の教育界の総合力は大きく落ち込んでいく危惧がある。

安達弘氏は、最近まで勤めた公立小学校教諭としての豊富な経験に基づく独自の分析によって、今の学校の現実がどうなっており、どういう解決策こそがポイントを突いているのかを分かりやすく伝えることができると伺い、日本の学校が再生するための有効な方策を考えたいと思い参加した。

(1) テーマ①

教育現場の多忙化は多岐に渡る。何もかもが学校に持ち込まれている。例えば放課後に地域や家庭で対応しなければならない事も学校にまず電話がかかってくる。そんな事が多々ある。

- 教員不足 ・公立学校で、現在 700 の学級の担任不在。校内の教師が日替わりで配置されるが、一日 150 の学級は教員不在のままである。
- ・教員になった人の半数が、7 年以内に退職

テーマ②学校が抱える情報についての負担

- 書類作成 ・指導要録等、ほぼ使われることのない書類作成や各種アンケート調査
→必要書類の精査
- 個人情報を抱える分、神経を使う。それでいて、校外の犯罪に関われない

テーマ③いじめ事案についての学校の責任

- 加害者への指導、被害者へのケア、両保護者への連絡・報告、同クラス・同学年・学校全体への指導のうち一つでも欠けると、敗訴という現実。
- 【いじめの定義】の変化。(いじめ防止対策推進法による徹底した対応)
- いじめ問題は様々な要素が入り混じる。→教師以外の専門家による解決

テーマ④専門家との連携について

- 学級崩壊
 - ・担任教師の力量・スキル、教育環境、家庭、児童自身（発達障害など様々な特性）
- 特別支援教育の徹底
 - ① 教室環境・授業の工夫・指導の工夫
 - ・構造化した板書指導・見通しが持てるしかけ・短い指示・特性に応じた指導
 - ② 専門家（SC・SSW の配置・サポート）

(2) 現場の実態

- (膨大なタスク・多種多様な仕事内容・責任感からの自己負担・世間の学校ニーズの多様化)
- ① 事故（熱中症・誤食）
- ② 外国にルーツを持つ子への対応
- ③ 教育現場のアンバランスな年齢構造
 - (若手の退職率の高さ・中堅の少なさからくる仕事量の多さ)
- ④ 一人当たりの役割の多さ（残業・休日出勤）
 - ←仕事量は減らないのに、定時退勤を求められる
 - USB の持ち帰りは個人情報の観点からできないが、職場での仕事もできない
- ⑤ 子育て世帯の負担（家庭と仕事の両立の難しさ）
- ⑥ 保護者対応（お互いの相違）
- ⑦ 地域、放課後、児童虐待、外国籍保護者支援、困り感のある家庭の支援等への対応
- ⑧ 法的なサポート等の無さ（警察・弁護士・スクールロイヤー）
- ⑨ ICT 関係整備（タブレット点検・ズーム環境の整備・アカウントの管理）

⑩ 人材不足・教員不足

⑪ 学級崩壊からの立ち直りの難しさ

○見えてきた一人の教師の現状

一人の教師が学習内容を上手に教え、生活指導とすべての児童生徒に関わる事務手続きをし、防犯や防災に気を付けながら、一人ひとりのアレルギーをチェックし、AED（心肺蘇生用の医療機器）を使えるようにし、環境教育や情報教育に慣れ、福祉ボランティア教育や国際理解教育を教え、さらに食育や消費者教育に気を配り、尖閣諸島や北方領土の意識を盛り立てて日本人としての誇りを持たせ、学力向上や人権教育のための研修を積み、さらにスポーツ指導や部活や校務分掌を担当しながら、要望が強くなりがちな保護者の声に応える、

(3) 学校はどう変わればよいのだろうか（安達先生の提案）

- ①学校・地域・保護者が共同して子育てをするよき伝統の復活
- ②学校が管理する情報の見直し
→学校教育法施行規則第24条の改正で指導要録を廃止
- ③全校にスクールサポートチームの設置
- ④他行政機関・業者委託できるものを明確にし、スリム化する
- ⑤担任制の廃止
- ⑥改革実行者である現場の教師が改革提案者として参加する
- ⑦人材確保
- ⑧教育予算を上げる（施設管理・安全管理の専門家等を雇用）
- ⑨ 先生は先生だけ（フィンランドの学校）

(4) 学校はどう変わればよいのだろうか（久保直子の提案）

私は、公立小学校で22年間勤務してきました。現場での経験から公立学校は、既存の延長線上の改革では回復することはできるのかという疑問があります。そもそも、今の公教育は時代にも子供にも合っていない。一人ひとりの個性や能力を育むための教育が一斉指導の元に行えているといえるのでしょうか。本市で、801人の児童生徒が不登校です。全国では約29万人もの子供達が学校に行っていないのです。そして、毎年増加の傾向であり、今後も増加するでしょう。多様な教育環境を提供する事が急務ですが、今の学校組織の在り方では、何年かかっても大きく変わることはないと思います。GHQが日本人を従わせるために作った教育制度を未だに引き継いでいる公教育。公教育の存在が、却って多様な教育環境の整備を阻んでいないでしょうか。公教育とは何なのでしょう。その存在意義は何なのでしょう。その前提から考えること、日本の教育の歴史から考えること抜きにして、子供にとっての本当に必要な教育環境を整備していくことはできません。

安達先生のお話は、今の学校の現状がよくわかるご講演でした。細かいところまで丁寧に説明されて

おり、実態がよく見えてきました。流石、現場経験豊富な先生だと、納得のいくお話でした。しかし、不登校の子供達やその保護者の声、採用から7年以内に離職した教師の声を何より尊重して聞かねば問題の本質は見えてこないのではないかと私は思います。枠にはまった中で育ち、枠から出たことのない先生方には、問題の本質を見る目を持つことは難しいでしょう。本来は、当事者の声を尊重して聴き、そこから学ばねばなりません、これまでの価値観を大きく覆すほどの域に行かなければ決して理解できない事なのです。それ程の大転換期だという覚悟が必要です。根本から見直さなければ道は開けてこないのです。

私は、7月定例会で「本来、子供への愛情が深く熱心な先生方が、長時間勤務で心のゆとりがない中では、子供達に適切な関わりが持てるのでしょうか。先生方がご自分の生き方や人生について向き合えるような時間が持てる様、教育現場全体の働き方改革を市費を投じて推進して頂きますよう要望致します。」と発言させて頂きました。

文部科学省が「主体的な学び」の実現を子供達に目指す前に、先生方は主体的な学びが出来ているのでしょうか。先生方が多忙で、目の前の事に追われている中では難しいでしょう。授業改善、教科指導等の技等についてだけではなく、広く社会に出て民間企業や様々な場での豊かな経験が日頃より必要であると私は言いたいのです。一部の先生方だけではなく、子供の前に立つ全ての先生に必要であると言いたいのです。先生方が好きなこと、興味のあること等を「主体的に学べる」職場の環境を作る事は、先生方、子供達、これから教職を目指す方にとって夢や希望になるでしょう。視野の広い先生方が増えることで、新たな教育の可能性が見えてくるでしょう。先生になりたいくて先生を目指した方を大切にすることが今最も求められていると考えています。やりがいのある職場環境なら輝く先生が増えるでしょう。

江戸時代、寺小屋や私塾は今の学校数の何倍もありました。先生は教えたい事を教え、学びたい者が学びに来ました。人の個性がそれぞれであるように、学びたいこと、興味のあることはそれぞれです。教える側も、自分が教えたいことを教える時、何よりいきいきと教えることが出来ます。いきいきと教える先生の授業は、実に楽しいものです。学ぶ者は、子供達だけではなく、大人も生涯を通して学ぶのです。良い循環が生まれる事こそが自然ではないでしょうか。

今は、その真逆です。全員が一律のことを学び成果を求められます。興味のないことを延々と学ぶことで学ぶことや勉強がわからないのに置き去りにされていることで勉強が嫌いになり、大人になった日本人は学ぶことを放棄した人が他国に比べて多いという現実には悲しすぎます。教える側も、全ての事を学習指導要領に沿って教えるという時、本当に心からわくわくして教えているのでしょうか。その前に、人は、誰かから教えられて学ぶのでしょうか。教育とは、与えられるものでしょうか。一人ひとりの中に、興味の芽、可能性の芽は無限にあるにも関わらず、その選択肢はどれだけ用意されているのでしょうか。何歳になったからこの勉強をすとか、子供より大人の方が優れているとか、そんなこともあります。

大人の皆さんが、生き生きと生きられる社会にすることが子供の夢であり希望です。あなたは自分の本音で生きていますか？人の評価等気にせず、自分だけの軸を持っていますか？一人ひとりの人が、自分らしく生きる社会になるための教育が本当の教育だと私は思います。それが実現できる環境が、今必要な学校です。学校の規模、形、教える内容、そこで働く人について、全てにおいて正しさはありません。個性の数だけ学校もあるのが本来の姿ではないかと思えます。先生には資格も免許もなくて良い。それくらい、人が持っている本来の力は光り輝くものであり、みんなが先生です。そんな社会になる日

はもう少し先かもしれませんので、まずは、先生方がゆとりを持って研修できる環境作りを行政が推進していくことはできると思います。

最後に、最も大事なことは、教師が愛情を持って児童生徒に関わるという事だと思っています。学校現場は、日々慌ただしいという事もありますが、先生方の意識としてはいかがでしょうか。「学校の先生との関係」について思い悩む児童生徒は実に多いです。心無い言葉をかけられたり、対応されたりすることで先生に対して不信感を募らせる子供達や保護者は存在します。「学校の責任」とは、誰に対するものでしょう。自己保身に走ってはいないでしょうか。先生自身を守る術は身に着けても、子供達や保護者に寄り添い守る先生方が学校にいない中では、安心して学校に子供達を預けることはできません。

「学校の責任」とは、子供達一人ひとりがいきいきと社会で生きていけるようにすることだと私は思っています。さらに、社会の一員としてのみならず日本人としての誇りを持ち、世界平和を目指し、国際社会の中で生きていける力を育てることだと思っています。そのためには、まず、子供達一人ひとりを先生方が理解し、その声を反映させた教育現場を構築していかなければなりません。保護者の意見も貴重な意見だと尊重して聴かねばなりません。無知や無関心ではなく謙虚に学ぶ姿勢を持ち、それらに時間を割くための職場環境が必要なのです。学校は地域の住民の貴重な居場所です。心の通うあったかい居場所になるよう、先生方の心を本来の豊かさが発揮できるよう、いきいきと働ける職場環境を吹田市独自で考えていく必要があり、共に教育を考える皆様と一緒に進めて参りたいと思っています。

教育は国の要、子供達の教育に携わる先生の資質能力は子供達の、国の未来に大きく関わるのですから。

令和5年7月7日

参政党吹田市議会議員 久保直子

